

狐の渡



土田耕平
作

登場人物

旅人

コン助

宿のあるじ（あるじ）

◆科野の国。旅人にコン助が声をかける。
◆ナレーター、旅人、コン助

むかし、一人の旅人が、科野の国に旅して、野路を踏みたがえ、犀川べりへ出ました。むこうへ渡りたいと思いましたが、あたりに橋もなし、渡も見えず、困っておりますと、

コン助 「もうし、旅のお人。」

という声がします。見ると、いつどこからとも知らず、一人のうつくしい顔した子どもが舟をこぎよせているのでした。

コン助 「渡しのコン助というものだが渡しの御用はないかな。」

といますので、

旅人 「御用は大有りだ。早くわたしてくれ。」

と旅人は舟にとび乗りますと、子どもは艫をたくみにあやつつてむこう岸へつきました。舟をおりようとして、旅人がひよいと見ますと、へさきに立っている子どもの尻べたから、長い尻尾が垂れていました。

なんだ、狐なのか、未熟な狐めが化けそこねているわい、と旅人はおかしくなつて、舟を下りました。岸べりに、はびこっている、葛の葉を一枚むしりとつて、何げない顔で、狐の前にさし出して、

旅人 「さてコン助さんとやら、渡し賃に小判一両あげる。さあさ、

遠慮なく受けとりな。このあたりには、よく狐めがいて人を化すという噂だが、わしは狐じゃない。葛の葉を見せ変えて、小判だなんていわぬから、よくあらためて

受けとりな。さあさ。」

コン助は、えらく恐入ったようすをしていましたが、きゆうに、旅人の手から葛の葉をもぎとるようにして、ぷいとすがたを消してしまいました。そのあとで、旅人は、ひとり大笑いしました。

二場

◆宿場。宿に旅人宛の手紙が届いている。
◆ナレーター、旅人、あるじ

それから、旅人は道をいそいで、夕方宿場へつきました。

宿をとろうと思ひまして、目にとまったはたご屋の門をくぐりますと、宿のあるじは旅人のすがたをつくづく見て、

あるじ 「ききほど、お知り合の方だと申されて、うつくしげな

お子供衆から、これをおあずかりしました。」

とって状箱のようなものを出しました。

旅人 「わしは、この辺には知り合なぞない筈だ。人ちがいではあるまいか。」

とふしんに思ひながら、その状箱のようなものをあけてみますと、

コン助 サッキハ、バケソコネテ、オカシカッタダロ、

コバンハ、カエシテヤルヨ、コンスケ。

としたためて、みごとな小判が一枚入っていました。

さては 渡の狐であったのかと、旅人は合点して、小判を火にあてましたところ、めらめらと焼け失せてしまいました。

おどろいたのは、宿のあるじでしたが、旅人から狐の話を書いて、一しよに大笑いしました。

狐の手紙は、あるじがもらいうけて、家の宝にしてあるとかいう話であります。

〈完〉

Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学 土田耕平 『狐の渡』 Podcast 版

発行日 令和 2 年 12 月 6 日

著 者 土田耕平

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
旧仮名遣いを新仮名遣いに直しました。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底本 『日本児童文学大系 第九巻』ぽるぷ出版

初出 1936（昭和 11）年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/001179/card45144.html>

